

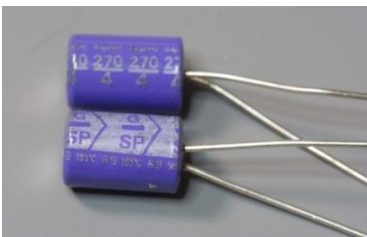
## SANYO OS-CON 入荷しました！

『OP アンプ MUSES で作る高音質ヘッドホン・アンプ』では、キーパーツである SANYO OS-CON の入手が難しくご迷惑をおかけしています。

この度、少数ですが非磁性リード SP シリーズの入手に成功しました。すべてを試聴して OS-CON サウンドであることを確かめています。ぜひ OS-CON SP シリーズをご使用戴き、MUSES OP アンプの音をお楽しみ下さい。

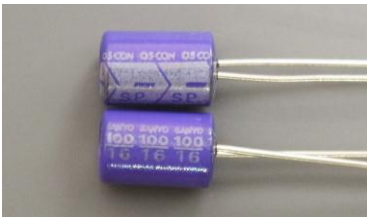
ご購入は(有)イーディオ [info@aedio.co.jp](mailto:info@aedio.co.jp) まで。

(価格はいずれも税抜きです)



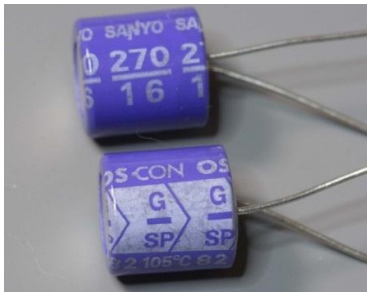
**4SPS270M @200 円**

4V 220  $\mu$ F。ヘッドホン・アンプ C3~C6、パワー・アンプ C3~C6 に使用します。いずれも、出力段パワー・トランジスタのバイアス安定&信号バイパスとして働くコンデンサです。ここに優秀なコンデンサを入れないと、落ち着きのない安っぽい音になってしまいます。



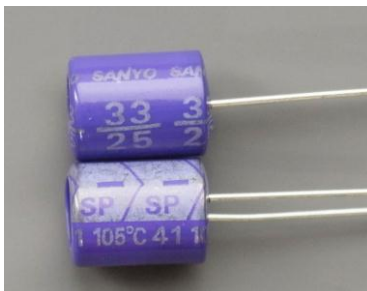
**16SPS100M @200 円**

16V 100  $\mu$ F。松コース・ヘッドホン・アンプのレギュレータ基板 C1, C2 に使用します。イーディオ製ヘッドホン・アンプ基板 C9, C10 に使用してオペアンプとパワー段の電源を分離することもできます。



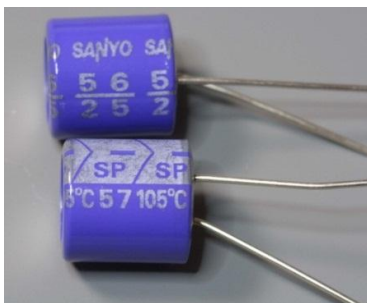
**16SP270M @350 円**

16V 270  $\mu$ F。ヘッドホン・アンプ C7, C8 に使用します。電源ラインのバイパスコンデンサです。分解能の高い OS-CON サウンドを聴かせてくれます。



**25SP33M @300 円**

25V 33  $\mu$ F。パワー・アンプ C7~C12 に使用します。レギュレータ基板の C1, C2 にも何とか入ります。ディテール再現に優れる OS-CON サウンドを聴かせてくれます。



**25SP56M @350 円**

25V 56  $\mu$ F。パワー・アンプ C7~C12 に使用します。

## コンデンサの容量による音の違いについて の 別府の評価

コンデンサは銘柄によって音が変わります。リード線の材質は言うに及ばず、電極の構造、電解液の組成、ケース構造など、音に影響を与えるパラメータは多数あります。私の耳では判別できませんでしたが、プラスチックの外皮によっても音が変わるとの話もあります。では、容量はどうでしょうか。

電源のパソコンでの経験です。同じ銘柄で、同じ耐圧、さらには同じような保存状態であったと条件づけます。もちろんフィルタ回路などの容量が周波数特性に直接影響する用途ではありません。

まず、3倍までの容量差では、差が聞こえたことはありません。例えば  $100\mu\text{F}$  と  $330\mu\text{F}$  で聞き比べしても差が感じられることはありません。それよりは、銘柄による差はるかに大きいですし、同じ銘柄で同じ容量であっても、2, 3日使っていたか買って来て初めて通電するかの違いの方がはっきりと聞こえます。

10倍の容量差とすると、例えば  $1000\mu\text{F}$  と  $10000\mu\text{F}$  では、違いが聞こえることがあります。もっとも電源での比較では、電圧安定化回路か電源の整流コンデンサが入った状態での試聴です。そちらの影響が大きいのかも知れません。

その音の差ですが、一般的には、容量が大きくなると低域が出てくる、と信じられているようですが、そのような経験はありません。むしろ高域の透明感の差となって聞こえます。音場の見通しが変わってくると表現できるかも知れません。大きい方が良くなると一概に言えませんが、だいたいは大きな容量の方がすっきりと見渡せるような感じになります。

容量で議論できないことは、たとえば  $330\mu\text{F}$  のケミコンに  $0.22\mu\text{F}$  のフィルムコンをパラに接続すると音色が大きく変化することからもおわかり頂けるかと思えます。

中には「ケミコンは周波数特性が悪いから・・・」などと記されている記事を散見します（しかもタマアンプで）。しかし、これは物理特性を表した議論ではないと考えます。なぜならそのアンプのカットオフ周波数より数十倍高いところまで、ケミコンはコンデンサ ( $1/j\omega C$ ) として動作しているからです。

ケミコンのパソコンで数 MHz の発振を止めることもあります。ディスクリートアンプの動作安定に働くのですから「周波数特性が悪いから・・・」は、空想上のこじつけとしか考えられません。

異種のコンデンサを並列使用して音が変わるのは、そのコンデンサを可聴帯域の信号が通過することにより、コンデンサの持つ音色が、アンプの音に附加されるためと考えます。

以上のように、パソコンに関しては、ある程度の大きさがあれば、容量の値についてはそれほど神経質ではありません。容量よりも、コンデンサの質に注意を払うべきと経験しています。言うまでもありませんが、フィルタやカップリングなどでは容量値は重要です。